

興味を持つてるのは日常の言語生活です。戦禍も少い日本は美しい自然を沢山持っております、全国どの地方でもその地元のお祭りが楽しく行なわれ日本の固有文化の伝統が守られているのになぜ言語生活では自分の言葉を守らないか分かりません。漢文化圏だけに漢字や漢字語を使うのは当然だし又、和語や漢字語にも無い外来語や学術語を使うのもごく自然的だけれど、自国語で立派な言葉がありながらよその物を使うのは日本の国語政策を分からぬ限り理解できないと思います。ちょっと例を上げて見ると、「パパ」「ママ」「ハント」「ダメージ」「メリット」……それに外国語自身を略して、「バイト」かの有名な爆破事件の「マイト」事件……このような単語が大衆に一番影響の大きい新聞やテレビで使ってるから、ぼくとしては納得できませんでした。でも新聞、雑誌等がどんな言葉を使おうと自由奔放にペンをふり回す事のできる言論の自由には大歓迎でした。昔からのことわざのごとくペンは権力（剣）より強い事実を証明している見たいです。一筆により日本一の権力者を倒した事はウォーターゲート事件と並んで無冠帝王の勝利だと思います。

日本の電鉄は庶民にとって非常に便利な足になってるが庶民のバスは不便だと思います。自家用車の無い者でちょっと離れた郊外の団地等で住んでる住民や三鷹天文台で夜遅くまで残る人達はよく感じます。ぼくのように走るのが好きな人は夜バスが運行しなくて西調布まで 13 分 30 秒位で走れるからいいがそうでない

人は料金の高いタクシーを乗らなければなりません。このような事は全部マイカーが多すぎるからと思います。子供達が夢中で遊んでいるせまい道まで車が突込んで来てはかなわないと思っています。

初めて三鷹天文台に来た時びっくりしました。町の中にあったからです。人口が増えると食糧住宅の問題だけで無く観測所とか OD 問題にまで大きい影響を与えていた事が分かります。東京天文台の談話会に出たたびに多勢の研究者達が活発な議論を展開しているのを見ると何時我国でもあのような光景を見られるかと考えてしまいます。昔我国も千年もずっと前統一新羅時代にすでに胆星台と言う天文観測用塔台が建てられており、今にもその誇高き姿が幸にも数多い外侵の戦禍から逃れ慶州に残っているけれど、天文学が学科としてソウル大学に設けられたのは実に日本より約一世紀も遅いと言う事は何を意味しているでしょう！幸にして最近我国でも国立天文台を持てるようになり先祖に対しちょっとでも面目を立てる事が出来たと思います。ここで天文台建立の為め八方に努力して下さった方々に感謝している事を申し上げます。まだ小型だけれど天気が日本より遙か恵まれているので良い観測ができると思います。昔と違ってこれから両国は国民同士の眞の交流が要求されるだけに雑音の多い政治や経済交流より天文学のような純粹学問とか人道的立場に基くいろんな民間交流を通じてお互いなかの良い関係を結ばれるよう希望しています。

(原文のまま)

日本天文学界に寄せて —その印象—

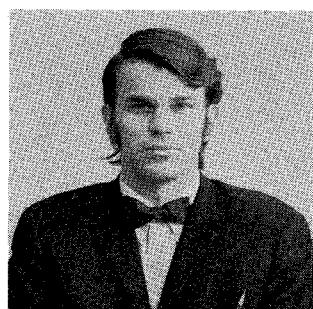
京都大学・工・航空工学教室・桜井研究室 S.A. ソレンセン

科学が、唯一の眞の万国共通の世界だと一般によく言われている。これは少し言いすぎかもしれないが、あらゆる点で真実と言える。興味の対象は、国境を越えて、互いに重複し、研究の方法の違いは、国民性に寄るよりも、個人の趣向に基づくものである。だから日本の天文学界を他から引き離して、それについて私の意見を述べるという事は、一見困難のように思える。

私は、2年前、デンマークのオールフス大学（オーレ・レーマー天文台）から日本に來た。オールフス大学は、コペンハーゲン大学について、デンマークで二番目に古く、規模も大きい大学（学生定員 1,5000 名）である。そういう点でオールフス大学は、現在私が所属して研究を進めている京都大学（航空工学教室・桜井研究室）と似ている。それにもかかわらず、いろいろの違いがある。そのひとつは、日常研究生活の中で出くわす、文化的背

景の違いである。しかし、この違いは非常に抽象的な形で現れ、それに私の妻が日本人であるために、それは私にはあまり気にならない。

もっと具体的な違いは、日本ではおびただしい数の科学者が、天体物理の問題に興味を持っていることである。これは、デンマークより 20 倍も人口が多いという事実からだけくるのではなく、専門的な天文学の分野以外で、これらの問題を研究している研究者の数からくるものである。私自身、理学部に属せず、天体物理に直接関係の



ない工学部の一教室で研究しているのであるが、ここでも天体物理学に関連する問題への関心は大きい。こういう事はデンマークでは、非常にまれで、天体問題への関心は、天文学教室に限られている。これは、専門学者に対しても、アマチュア天文学者に対しても、いえることである。日本の大きい本屋を、ちょっと眺めて見れば、天文学一般や、天体観測のテクニックに至るまで、莫大な数の、理論的、かつ専門的な書物が並んでいるということからも察しがつく。

外国の大学を訪れ、研究をする主要な目的は、その国の科学者と交って、新しい知識を得ることにある。だから日本の諸大学の間に完全なコミュニケーションが出来ているという事は、私にとって、まことにありがたいことである。ヨーロッパに比べて、日本は、研究会活動が

非常に盛んで、特に私の心を打ったのは、若手の研究者に、彼らの考えを持ち出させる機会を与え、出席者の間で、いかにスムーズに、意見の交換を行うかである。これは、日本の大学の教授と学生との緊密な関係のひとつの現れとも見られる。実際、教授と学生との関係は、極めて個人的であって、学生が就職したり、他の研究室に移った後も、もとの研究室をなつかしく思うのが普通で、これは、日本独特のものと思われる。

結論を言えば、日本の天文学界に関する私の印象は、戦前のヨーロッパ黄金時代には、ヨーロッパにもあったが、残念ながら、今では完全に消滅しつつある、特殊な学問的雰囲気が、日本になおも、生き続いていることである。

1975年2月1日

(ソレンセン和子訳)

掲示板

グリニジ王立天文台三百年祭

グリニジ王立天文台は1675年6月22日にCharles二世王の命によって創設され、1948年から1957年の間に現在のSussex州Herstmonceuxに移転した。今年は創設以来300年目に当るので、多くの科学者の参加を得て300年祭が開かれる予定である。

グリニジのNational Maritime博物館との共催で多くの行事が行われる。例えば、Herstmonceuxの王立天文台の特別見学会や、博物館での国際歴史学シンポジウム(1975年7月14日~18日)の開催等である。

天文台の歴史が(3巻の本にまとめられて)今年中に出版される予定である。

詳細は、以下に問い合わせて下さい。

The Public Relations Officer, National Maritime Museum, Greenwich, LONDON SE10 9NF, England.

1975年2月の太陽黒点(g, f) (東京天文台)

1	0, 0	6	2, 22	11	1, 19	16	0, 0	21	—, —	26	1, 1
2	—, —	7	—, —	12	2, 13	17	0, 0	22	0, 0	27	—, —
3	3, 10	8	1, 20	13	1, 2	18	0, 0	23	1, 1	28	0, 0
4	—, —	9	2, 30	14	1, 2	19	0, 0	24	1, 8	*	*
5	2, 5	10	1, 21	15	1, 4	20	0, 0	25	1, 3	*	*

(相対数月平均値: 18.6)

昭和50年3月20日	編集兼発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	森 本 雅 樹
印刷発行	印 刷 所	〒112 東京都文京区水道2-7-5	啓 文 堂 松 本 印 刷
定価 300 円	發 行 所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内 電話武藏野31局(0422-31) 1359	社団法人 日本天文学会 振替口座東京 13595